
ゴスロリAngelかな

天草 蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴスロリAngelかな

【Nコード】

N8708P

【作者名】

天草 蘭

【あらすじ】

ゴスロリ好きの美少女天使カナはある日自分以外の可愛い女の子が許せない女神さまによって人間にされてしまう。天使にもどるには人間界を脅かす怪人達を倒さなければならない！果たしてカナは天使に戻るのか。

訂正作業終わりました！

真心率5

4%

人物紹介（書き直し）

○メインキャラ○

かな

ヒロイン。ゴスロリを好む元天使。髪はツインテールで、左目に泣きボクロがある。メイクはAge嬢風。ゴスロリだけでなく、和ゴスや姫ロリなども着用。自分以外の美少女が許せない女神さまによって人間にされてしまう。

蒼汰そうた

人間となったカナと同じ高校に通う純朴系美少年。銀髪に青いハチマキ、空色の目。左の頬に二本の傷があり、青い甚平を着ている。家は大富豪で世界の金の90%を占めるといふ。好物はりんご飴。

西王母せいおうぼ

自分以外の美女、美少女は許せない女神。絵に描いた仙女のような美しい容貌をしている。かなを人間にした。

ホド

魔法使い一族セフィロト家の一人。ビーバーそのものの姿で、魔法使いの帽子をかぶっている。人間となったカナを保護…。

レイシエン
神麗

人間界を狙う魔王。“銀髪に紫の瞳”をした美しい顔立ちで、紫を基調とした中国風の豪華な衣装を着ている。人間界に怪人を送り込

んでいる。セクシーな魔王であり、色気で人々を誘惑し操る。

たけいち
竹一

蒼汰の兄でカナが一目惚れしてしまうクールな美青年。サファイアのような色の瞳、黒が基調の服に青いマフラーを巻いている。職業はバイクレーサー。第二次世界大戦ごろの実在人物である。

ローズベルト

かなの通う高校の保健室の先生。ベルばらに出てきそうな風貌のナルシスト美男子。料理が得意。第二次世界大戦ごろの実在人物である。

ユキコ&あみ

カナのクラスメイト。ユキコは占い好きで、あみはローズベルト好き。

○団体○

クロスフレイヴ
十勇士

遙か昔に暴れ回った大魔王を封印した十人の勇者とその力を受け継いだ子孫。それぞれ聖剣を持っている。「真田十勇士」がモデル。

セフィロト家

大魔導師ケテル・セフィロトを祖とする魔法使いの一族。

かな、人間になる（前書き）

場面がかわる時は―――が出ます。

かな、人間になる

ここは女神さまと天使達が住まう天上界…

おや？誰かが叫んでいるぞ

少し見てみよう！

天使「おーいカナ！」

かな「なーに？」

天使「女神さまが呼んでるぞ！宮殿まで来いって。」

かな「へえ女神さまが？一体アタシに何の用だろう？ま、行ってみよっと。」

―――宮殿

絵に描いた仙女のように美しい女神が玉座に腰をかけていた。
女神の名は西王母^{せいおうぼ}という。

西王母「あんた、カナっていったわね？」

かな「あ、ハイ。」

西王母「あんたさあ、たかが天使の分際で可愛くないかしら？」

かな「え？」

西王母「この天上界に私以外の美少女は要らないの、分かる？だからね…」

かな「な、何ですか？」

西王母「人間界に堕ちてもらわよ、いいわね？てゆーか強制よ！」

かな「そ、そんな〜！」

その時！

カナの背に生えた白い翼が光となって消えてゆく！

そして強い風がカナを吹き飛ばした！

――かな「きゃ！」

かな「いたたたたた…、どこだろう、ここ？」

辺りを見回すと、翼の無い天使達がいた。

いや、天使ではない、人間だ！！

かな「人間…界？アレ？アタシ…翼がない！？……そっか、アタシ人間になっちゃったんだね。…って、のんきな事言ってる場合じゃないよ〜！アタシこれからどうすればいいの〜！？」

人間達は地面に座り込んでいるカナを変な目で見ています…。

中にはカナを可愛いと思ってやらしい目で見ていますオッサンやオタクもいます。

カナのそばを、手にりんご飴を持ち、青い甚平を着た純朴な美少年が通りかかる。綺麗な空色の目で左の頬には二本の傷がある。髪は銀色で青いハチマキを巻いている。

「???」お前、こんな道のと真ん中に座り込んで何してんだ? 変な奴だな。あ、変な人とは関わっちゃダメって言ってたな、行こ行こ。

「

かな「な、何よ、か弱いレディにたいして失礼ねえ! でも可愛い男の子だったな、何か素朴な感じで。ん? ビ、ビーバー! ?」

カナの目の前に帽子をかぶったビーバーが立っていた。

ビーバー「おや、お前さんワシが見えるのか?」

かな「喋った!」

ビーバー「おどかしてスマンの。ワシはホド、ホド・セフィロトじゃ。こんな姿じゃが一応魔法使いじゃよ。普通の人間にはワシは見えないのじゃが見えたということはお主、ただ者ではないの? そうじゃ、困ってる様じゃしワシの家に来んか?」

かな「え、お邪魔していいの？」

ホド「ああ構わんよ。」

かな「有り難う！」

突如現れた謎の魔法使いビーバー、ホド。
果たしてカナはどうなるのか！

かな、魔法少女デビュー

ホド「着いたぞ。ここがワシの家じゃ。」

かな「可愛い家だね！」

ホド「さ、入った入った。」

かな「お邪魔しまーす！」

ホドはダイニングルームにカナを案内する。

中央にはテーブルが一つ、椅子が二つあった。

ホド「そこに座って。」

かな「うん。」

ホド「ちょっと待つとれ、ほいつ！」

ホドが杖を振るうとテーブルの上にイチゴのショートケーキとコーヒーがそれぞれ二つずつ出てきた。

かな「わぁ、おいしそう！ホドってすごいね！」

ホド「こんな魔法なんてまだまだ序の口じゃよ。さあ、お食べ。」

かな「いただきまーす！お、おいしい〜！」

カナはケーキを食べながらホドに質問する。

かな「ホドって一人暮らしなの？」

ホド「まあな。」

かな「寂しくない？だってずっと一人なんですよ？」

ホド「いや、それに今はかわいいお嬢さんが居るしね。」

かな「どうしてホドはビーバーの姿なの？」

ホド「昔は人間だったんじゃが、イロイロと事情があって今はこんな姿をしてる。」

ホドはコーヒーを一口飲んで言う。

ホド「そういえば名前を聞いてなかったな？」

かな「アタシかな！」

ホド「カナかあ。で、カナよ、どうしてあんなに困っておったのじゃ？」

カナはこれまでの事をホドに話す。

ホド「なるほどのお。」

かな「友達とかきつと心配しているし、アタシ帰らなきゃいけないの。でも、どうすればいいのかわからなくて…。天使達は女神さまの許可なく地上に降りれないから、迎えに来れないし…。」

ホド「……ワシは一人につき一つの願いを叶えることができる。自分自身の願いは叶えられないが。」

かな「ほ、ホントに!？」

ならアタシの願いを叶えてくれる？」

ホド「構わんよ。が、そのかわり…。」

かな「そのかわり?」

ホド「ワシの願いを叶えてもらっ。」

かな「それ、アタシに出来る事?」

ホド「ああ。」

かな「どんなお願い?」

ホドはしばらく黙って言う。

ホド「今この世界は怪人達に狙われて大変なんじゃよ。それを全部カナにやつつけてもらいたい。」

かな「いいよ!」

ホド「交渉成立じゃな。ではこれを。」

ホドは先に星の飾りが付いたシンプルな魔法の杖をカナに渡した。

ホド「それは怪人達と戦うための杖じゃ。今は火、水、地、風の四つの魔法しか使えんが、カナが強くなればもつとたくさんの魔法が使えるようになる。」

かな「へえ、そうなんだ。じゃアタシ頑張るね!」

ホド「で、これはワシとカナが初めて出会った記念に…」

ホドはカナにプレゼントの箱を渡した。

箱を開けると中にはカナの好きなゴスロリ衣装が何着も入っていた!

かな「わあー!ありがとう!すごく嬉しい!」

ホド「それからここに居ていいよ、願いが叶うまで。」

かな「いいの?ホントいろいろとありがとう、ホド。」

U
U
<U

かな、学校に行く

カナの町にある、「スターウッズハイスクール」という有名な高校。有名と言っても名誉ある話ではない。

確かに偏差値は高い方だが、服装が乱れすぎ！

普通に私服で、制服を着ていたとしても、様々な種類の制服を着ている。コスプレとか当たり前！

カナは人間界の常識を学ぶためにホドのすすめで、そこに通う事に…。

――？年B組

ここの担任は、京子という生徒指導。眼鏡かけたオカッパのおばちゃん。喧嘩最強でアン○ニオ猪木に勝った事がある。

若い頃はオードリー・ヘップバーンの様な美女だったという都市伝説が語られている。

京子「あんた達、いつになったら服装きちりしてくるの！？制服きてる奴はいいけど、私服集団はどうなの！？特にコスプレ！そんな格好でファンタジーの世界に入ったつもり！？あんた達もう高校生よ！現実逃避してないで、早く大人になりなさい！！」

山田「出た、京子ちゃんの説教。」

加藤「コスプレ」現実逃避って違っでしょ。」

田中「毎日うるせえババアだなあ。」

京子「こらっ、田中！ババアとはどういう事だ！？…まあ後できつちりと…。ところで今日は転校生が来ているの、仲良くしてあげなさいよ。おい、入れ！」

かな「はいつ。」

加藤「可愛い〜。」

田中「あのゴスロリ衣装たまんね〜。」

かな「カナです！早くみんなと友達になりたいです。ヨロシク！あつ。」

カナはりんご飴を食べている青い甚平を着た純朴美少年と目が合う。左の頬に二本の傷、綺麗な空色の目、髪は銀で青いハチマキを巻いている。

かな（昨日の子だ！）

少年「あつ、昨日の変な人！」

かな「な、何よ〜！」

武内「知ってんのか、蒼汰^{そうた}？」

どうやら少年は蒼汰と言っらしい…。

かな「へえ、蒼汰って言うのか、桃太郎みたいな名前だねっ！」

生徒「……………」

蒼汰「…やっぱり変な人だ。」

山田（天然！）

——男子達がカナにたかる。

男子「メアド教えてくれ！」

かな「…メアド？」

男子「……………」

次回はいよいよ怪人出現！

つづく

かな、戦う

カナのクラスにはユキコという占い好きな女子がいる。

手相占い、誕生日占いなど様々な占いの本をいつも学校に持ってきてはいろんな人を占っている。

ユキコ「昨日ね、有名な占い師さんに私の前世を占ってもらったんだ。そしたらね、私は前世、お姫様だったそうよ!」

あみ「へえ、ユキコ可愛いし、お姫様似合うじゃん。」

ユキコ「あみちゃんの前世も聞いてみたんだ。」

あみ「そうなの?で、私は何だったの?」

ユキコ「ゴキブリだって..。」

あみ「なにそれ、サイヤクじゃん!」

ユキコ「それから蒼汰くんの前世も聞いてきたよ。」

蒼汰「まじ!?何?」

ユキコ「南の国の王様!」

蒼汰「ふーん。」

あみ「あんたって今も昔もリッチなのね…。」

かな（蒼汰くんの家って金持ちなんだ…。）

ユキコ「で、カナちゃんは私と同じお姫様！」

かな「え、私もお姫様なの？」

あみ「いいわね、あんた達だけ…。」

蒼汰「なんだよ、俺は前世も変な人かと思った。」

かな「うるさいわね…。」

あみ「蒼汰くん、カナの事イジメてるけど、ホントはカナの事が好きなんでしょ？」

かな（はっ？）

蒼汰「ち、ちげえよ！ば、バカ。」

あみ「顔にかいてあるぞ、『俺はカナちゃんが大好きです。』って。」

蒼汰「うるせえ女だなあ、お前は…。」

――ホドの家

かな「ただいま！」

ホド「おかえり、カナ。」かな「今日も学校楽しかったよ！」

ホド「そうか…。」

かな「ねえ、ホド。あたしやホド以外に魔法使っているの？」

ホド「ああ、たくさんいるよ。中でもワシらせフィロト家は悪名高い魔法使いの一族。ワシらの祖先は『ケテル・セフィロト』という闇の魔法使い！何でも封印された大魔王の封印を解き、自在に操る魔法を編み出したんじゃ！おかげでワシらせフィロト家は十勇士クロスブレイヴに追われて大変じゃ。」

かな「十勇士？クロスブレイヴ」

ホド「昔、大魔王を封印した十人の勇者とその力を受け継いだ子孫の事じゃよ。」

かな「ホド、悪い人じゃ無いのにかわいそう。」

ホド「そう思うじゃろ？もっと年寄りをいたわってほしいもんじゃない。」

――翌日、五限目

かな「自習かぁ。案外退屈だね。…あれ、あみちゃんがない!」

ユキコ「ホントだ。多分保健室ね。あみちゃん、遅れて来るときや、自習のときはいつも保健室で話してるのよ。ローズベルトというハンサムな先生と。」

かな「その先生は注意しないんだね。」

ユキコ「まあここの学校は生徒だけじゃなく、先生も勝手だからね…。わたし、ちょっとトイレ行って来るね。」

――ユキコは手を洗っていると後ろから何かに突かれた。
ユキコが振り向くと、かわいらしい赤いスカートをはいたオカッパの女の子が立っていた。

ユキコ「誰?」

???「私は花子。」

ユキコ「えっ、ホントにいたんだ、花子さんって!」

花子「あなたの来世を占ってあげようか?」

ユキコ「そんなこと出来るの?占って!」

花子「いいよ、そのかわり私と遊んで。」

ユキコ「わかった。」

花子「じゃあ、鏡を見て。」

ユキコが鏡を見ると、ユキコの来世が映っていた。

どうやら来世はお嬢様らしい。

ユキコ「すごい…。」

キンコーンカーンコーン♪

ユキコ「ありがとう、私帰るね。」

花子「待つて。」

ユキコ「え？」

花子「遊んでくれるって言ったよね？」

ユキコ「あ、ゴメン！何して遊ぶ？」

花子「鬼ごっこ。」

すると次の瞬間、花子の顔が恐ろしい鬼の顔になった！

ユキコ「きゃー！」

――休憩時間、カナは あみとユキコの帰りを待っていた。

かな「遅いな。あつ、まさか………怪人!？」

カナは魔法の杖を持ち、急いでトイレへ向かう！

――トイレ

カナがトイレに着くと、花子さんが現れた！

かな「…ねえ、ここにユキコちゃんって女の子来なかった？」

花子「来たよ。今は私のお腹の中にいる。後、あみや京子って人も」

かな（あみちゃんも？って、京子先生まで!？）

花子「鬼ごっこしたんだ。で、捕まえたから食べた。」

かな「今スグみんなを吐き出さない!」

花子「嫌だよ。お前も俺様が食ってやるう!」

花子は鬼の顔になって襲ってきた!!

かな「くられ、カナちゃんファイアー!!」

花子「ぐわあゝ!!」

花子はユキコ、あみ、京子の三人を吐き出し、跡形も亡く消滅した!

かな「えー!? 弱っ。」

ユキコ「怖かった。」

あみ「もうサイヤクゝ!」

京子「くそっ、この私があんな奴に食べられるとはっ!」

かな「みんな無事でよかった。」

ユキコ「カナちゃんが助けてくれたの?」

かな「うんっ! あたしの魔法でやっつけたよ!」

京子「何言ってるの!? 魔法とか現実逃避してないで、早く大人になりなさい!」

あみ「まあどうでもいいけど助けてくれてアリガト。」

つづく

かな、デートの約束（前書き）

今回は「Z」でもっと活躍されている竹一とローズベルトが出てきます。

かな、デートの約束

かな「おはよう！」

あみ「あっカナ、おはよう！」

カナが教室に入ると蒼汰が女の子に囲まれていた。
蒼汰くんが成績優秀なため女の子が勉強教えてほしいとたかっているのだ。

かな「アタシあんがい馬鹿だと思ってた。」

蒼汰「おい変な人、聞こえてるぞ。」

かな「だからアタシはカナって言うてるでしょ！」

あみ「そうそうカナ、今からローズベルトに会いに保健室行くんだけど、カナもくる？」

かな「うん、行く。」

――保健室

あみ「おはようローズベルト、あら、今日は部外者は居ないのね。」

???「やあ、あみ、ボクに会いに来てくれたのかい？」そう言っ
て、何やらベルばらに出てきそうなナルシスト美男子が手にバラを
持って現れた！

髪は金髪ロングであり、赤いリボンで束ねている。

あみ「カナ、紹介するわ、私の愛しき王子^{プリンス}…ローズベルト様よっ！」

かな「うわ…。」

ローズベルト「カナちゃんか、可愛いね。宜しく。」

かな「あつ、宜しく願いします。」

ローズベルト「昨日クッキー作っ来たんだ、はいどうぞ。」

あみ「まあ、ありがとうございます！」

ローズベルト「カナちゃんもどうぞ。」

かな「ありがとうございます。」

あみ「ローズベルトは料理や絵とか得意なのよ。」

かな「へえ、そうなんだ。すごいですね。」

キンコーン、カーンコーン…

あみ「予鈴がなつたし帰ろう、カナ。」
かな「うん。」

あみ「また後で来るわ、ローズベルト。」

ローズベルト「あゝ、もう行ってしまうのか、ボクの愛しの姫君達よゝー！」

――廊下にて、

あみ「そうだカナ、そのクッキー蒼汰にあげたらどう？」『作って来たのゝ。』って言うて。」

かな「えーダメだよそんなの。」

あみ「大丈夫、アタシの分けてあげるから。蒼汰くんひそかにカナの事好きかもよ。」

かな「そんなこと無い！もしそうだとっても、アタシは蒼汰くんの事なんとも思ってないし。」

――夜、カナは一人で帰っていた。ゴスロリ衣装がやらしいと、京子先生の説教を受けていたたのだ。

かな「ゴスロリのどこが悪いのよゝー！」

カナちゃんが文句いいながら歩いていると、誘拐怪人、サラウゾーが現れた！

サラウゾー「可愛いお嬢ちゃん、おいで。」

かな「きゃ、怪人！」

カナは魔法の杖を取り出そうとするが、その前にロープで拘束された！

かな「しまった！」

サラウゾー「へへ。」

かな「どうしよう。」

その時！バイクが突っ込んできて、サラウゾーをぶっ飛ばした！

サラウゾー「ぐぎゃ！」

バイクにはスマートな体格のクールな美青年が乗っている。瞳はサファイアのように蒼く、漆黒の服に青いマフラーを巻いている。

かな「カッコイイ…。」

そのカッコイイお兄さんはカナを拘束していたロープを切る。

かな「あ、ありがとうございます。アタシ、カナっていいです。名前、聞いてもいいですか？」

カッコイイお兄さんは答える。

カッコイイお（以下略）「…たけいち竹一。」

かな「竹一さんかあ。何か金太郎みたいな名前ですね！」

竹一「…は！？」

かな「そうだこれ、貰い物なんですけど、お礼です！」

カナはかばんから蒼汰にあげなかったクッキーを取りだし、竹一に渡す。

竹一は袋を開けて一つ口にした。

竹一（これまさか、ローズベルトに貰ったのか？）

かな「お味、どうですか？」

竹一「うまいな…。」

かな「竹一さんはどんなお仕事されてるんですか？」

竹一「バイクレーサー。」

かな「へえすごい！竹一さんスッゴクカッコイイし、似合ってます

よ！」

竹一「君、見たところ学生だろ？どこの学校だ？」

かな「スターウッズハイスクールです！」

竹一「（やはりな、という事はアイツと一緒にか。）…家まで送って行こうか？」

かな「いえ、もう大丈夫だし、自分一人で帰れます。後ろに乗れないのは残念ですけど、今度会う時乗せて下さい。あっこれデートの約束ですよ！」

竹一（えっ！？）

かな「竹一さん今日はありがとうございました！さようなら！」

カナは手を振りながら走り去る。

――ホドの家

かな「ただいま！」

ホド「おおカナ、今日は遅かったね。」

かな「うん、待たせてゴメンね。」

ホド「いや、それより何か嬉しそうだな。」

かな「わかる？今日は帰り道に、とってもカッコイイ人にあったんだ。デートの約束もしちゃったし。」

ホド「なっ、で、デートじゃと!？」

――翌日、学校

あみ「カナ、あのクッキー蒼汰くんにあげなかったよね。まあいつか。それでどう、おいしかった？」

かな「それが…あげちゃたの。」

あみ「えっ、蒼汰くんにあげたの!？」

かな「違うの!昨日帰りが遅くなってヘンタイに襲われたの。そしてたらバイクに乗った人が助けてくれて、その人に…。」

あみ「…。」

かな「それがすごくカッコイイ人で、バイクレーサーなんだって!デートの約束もしちゃった…。竹一さんっていう人よ。」

あみ「えっ、うそ!?それって雑誌とかによく出てくる人でしょ!?あんたすごいわ、あんな大物とデートって。」

ユキコ「どうしたのあみちゃん？」

あみ「ちよつと聞きなさいよ、カナったら昨日竹一さんに会ってデートの約束したんだって！」

ユキコ「えー！？でも美男美女のデートって何だか少女漫画みたいでいいな。」

蒼汰「オハヨー！」

ユキコ「蒼汰くんだ！」

かな「ふんっ！」

あみ「残念だったわね、蒼汰。カナ、竹一さんとデートの約束しちゃったわよっ！知ってるでしょ、あの超有名イケメンバイクレーサー。」

蒼汰「あつ、それ俺の兄ちゃんだぜ。」

クラス全員「ええええええ！！！」

蒼汰「何驚いてんだ？」

かな「そんな、でも竹一さん弟がいてるなんて言わなかったよ。」

蒼汰「兄ちゃん照れ屋だからなあ、あんまり家でも話さないもん。」

ユキコ「今日は驚く事ばかりね。」

つづく

かな、怒る（前書き）

カナと竹一がデート！しかし…

かな、怒る

魔界、魔王の城

玉座に魔王が腰掛けている。銀髪紫目で美しい容貌をしており、紫色の豪華な中国風の衣装を身に纏っている。露出度は低いが色気が感じられる。

魔王の名は神麗^{レイシエン}という。

神麗「花子とサラウゾーがやられたと？」

側近「はっ。間違いありません。おそらく、セフィロト家か十勇士にやられたかと…。」

神麗「どちらにせよ、予の可愛い怪人達を倒した事は許せぬ。次は少し強い怪人を送り込もう。そうだ、中華まんを持って参れ。」

側近「はっ。かしこまりました！」

神麗（美しい地球よ、必ずや予の物にしてくれよう…。）

――人間界

今日はカナが竹一とデートする日。

かな「竹一さん！」

竹一「来たか…。」

かな「今日は宜しく願いしますね。」

竹一「ちょうど昼だし、おゴハンにするか？どこがいい？」

かな「竹一さんとだから、オシャレにカフェがいいな。」

その様子を遠くからあみ、ユキコ、そして蒼汰の三人が見ている。

あみ「ついに始まったわよう、竹一さんとカナのデート。」

ユキコ「ねえ、これって犯罪じゃない？」

蒼汰「あんなクールにしてるけど、兄ちゃんけっこう緊張してるぜ。」

ユキコ「あつバイクに乗ったよ。」

あみ「どこに行くのかしら？」

——カフェにて

かな「竹一さんってアタシのクラスの蒼汰くんのお兄さんだったんですね。」

竹一「まあな。」

かな「蒼汰くんねえ、アタシの事、『変な人』って言っていじめるんですよ、今度怒ってくださいね。」

蒼汰「ハクション！」

あみ「ちよつと移さないでよ！」

蒼汰「さてはあいつら俺の噂してるな？」

その頃大変な事件が起こっていた。

道路にはらまかれたバナナの皮を踏み市民が滑りまくっている！

怪人「オレ様はバナナ怪人『ツルルン』だ！さあ滑りまくれ！！」

女A「きゃー！」

女の子「ママー！」

爺さん「こ、腰が…。」

男「ぐぎゃー！」

女B「助けて〜！」

ツルルン「じゃあな！はっはっは！〜！」

ツルルンはぶん殴りたくなるような笑い声をあげながらその場を去る。

怪人出現の異変に気付いたホドはカナにテレパシーで伝える。

かな「竹一さん、今日はありがとうございました！アタシ帰ります！」

竹一「えっ？」

カナは困惑する竹一を残し、怪人の所へ向かう。

あみ「あら？カナどこか行っただわよ。」

「……ツルルン「はーはっはっは！〜！」

かな「待ちなさい！」

ツルルン「ん？誰だお前は？」

かな「アタシは魔法少女『ゴスロリAngel』かな」よ！覚悟しなさい、怪人！アタシはデートを台無しされてとっても機嫌が悪いの！！」

ツルルン「それは悪かったな。オレ様はバナナ怪人ツルルン、偉大なる魔王様の部下！！」

かな「『部下』か。何かダサい響きよね。」

ツルルン「何だと！？」

かな「くられ、カナちゃんファイヤー！」

ツルルン「くそ、くられ、熟熟バナナ！！」

熟しまくったバナナがカナにヒットする！

かな「な、何よコレ！？べとべとじゃない！せつかくのお洋服が！もう許さない！カナちゃんストーム！！」

ツルルン「吹き飛ばすだけじゃダメージは与えられないぜ！それに周りをよく見な！」

カナは周りを見るとバナナの皮に包囲されていた！！かな「しまった！これじゃ思うように動けない！」

ツルルン「いくぜ、熟熟バナナ連射！！」

かな「くっ、こうなったら…」

カナは新しく覚えた魔法を使う。

かな「カナちゃんサンダー！」

杖の先から雷の球が飛び、ツルルンに直撃した！

ツルルン「ぐっ、まいった〜！」

かな「ふう。」

――魔王の城

側近「神麗さまっ！」

神麗「何だ騒々しい。」

側近「バナナ怪人ツルルンがやられました！」

神麗「またかつ。」

側近「偵察隊を送ったのですが、ツルルンを倒した者の正体分かりました！」

神麗「誰だ？」

側近「魔法少女『ゴスロリAngelかな』です！」

神麗「はあ！？となると十勇士ではなかった事になるな。」

側近「相手が魔法使いとすると、セフィロト家の者かも知れません。

」

神麗「そうか…ならもう少し様子を見よう。もしかしたら『奴』が姿を見せるかもしれぬ…。」

つづく

かな、本当の戦い

――ホドの家

かな「ねえホド？」

ホド「何じゃ？」

かな「前に闘った怪人がね、『魔王様の部下』って言ったの。もしかして、ホドがアタシにしてほしい事って、怪人を倒す事じゃなくて……」

ホド「ああ、魔王を倒す事じゃ。」

かな「……」

ホド「魔王はこの世界を手に入れるために怪人を送り込んでくる！奴こそが黒幕！その名は『神麗^{レイシエン}』。」

かな「神……麗？」

ホド「神麗の魔力は強大じゃ、今のカナでは到底かなわない。だからもっと強くなるのじゃ、カナよ。」

かな「わかった、アタシもっと強くなるね。」

――翌日

かな（昨日のホド、なんか悲しそうだったな。）

ドッ！

カナは誰かとぶつかった！

かな「ゴメンなさい…あつ！」

蒼汰「あつ！お前は！？」

ぶつかった相手は蒼汰だった。

蒼汰「ちゃんと前見て歩けよ、変な人！」

かな「あんたこそぶつかったって事は前見てなかったんでしょ！それにアタシはカナ、変な人じゃない！」

ローズベルト「おやー、恋人ゲンカかい？いいね、青春って感じで」

蒼汰「ば、ばか、そんな訳ないだろ。」

ローズベルト「似合ってるよ…。」

蒼汰「はあ…！」

かな「ちよつと誤解しないで下さいよ！別に恋人同士じゃありません

ん！」

ローズベルト「そうなのかい？二人ともホッペが赤かったから…。」

カナと蒼汰はお互いに顔を見つめ合う…。

確かに赤だ…。

ローズベルト「ほらね…。」

蒼汰「だあゝ！やめてくれゝ！！」

蒼汰はその場から逃げる。

蒼汰（どうしたんだ俺？何か心拍数上がってるような、上がってないような…。アイツ見ると『胸が急に痛くなる』し、さては呪いかけやがったな、チクシヨウ！）

――5 限目

かな（あんな奴、好きじゃない！嫌い嫌い嫌い！アタシは竹一さんが好きなの！！竹一さん…ス・テ・キ。）

カナは何故か竹一にお姫様だっこされている自分を妄想…。大丈夫かしらこの子…。でもそのあと蒼汰の事を思い出してちよっと不機

嫌になる。

蒼汰（さつきから胸がいてえ、何なんだよコレ？最初から変な人って思ってたけど、黒魔術まで使いやがるとは。）

かな・蒼汰「先生、保健室行きます！あっ！」

蒼汰「何だよお前！？同じタイミングで！！」

かな「それはこっちのセリフよ！アンタの所為で気分悪いのよ！」

蒼汰「はあ！俺だってお前に呪いかけてさつきから胸が痛いんだよ！この『黒魔術師』！！」

かな「なんですって！？呪いとか魔術師って童話の中の話しでしょ？そんな子供みたいなこと言ってるやないで、早く大人になりなさい！（って、アタシ魔法使いなんだけどな。）」

ユキコ「まあまあ二人とも……。もしかして今の京子先生の物まね？」

―――学校帰り

かな「ああ、竹一さん！」

竹一「おう。」

かな「竹一さん見た瞬間さっきまでのイライラが消えました。」

竹一「またあの馬鹿な弟か？」

かな「はい。蒼汰くんのバカヤロー、何が呪いよっ！」

竹一「…。」

かな「竹一さんは今何してるんですか？」

竹一「ちょっと暇つぶし。そうだ、乗れよ、送っていく。」

かな「本当ですか？ありがとうございます！また竹一さんのバイクに乗れて嬉しい！」

カナは竹一の後ろに乗る。

奥様A「ちよつと見て、竹一よ！ってあの後ろの女誰よ！？」

奥様B「もしかして彼女？」

奥様A「何！？竹一は私の王子様だったのに！」

奥様C「でもいつ見ても、カッコイイわね。」

奥様B「ね〜。」

奥様A「おだまりっ！」

――ホドの家

かな「ただいま！」

ホド「今日は早いの。」

かな「竹一さんに送って貰った！」

カナが楽しそうに話している頃…

――

女学生A「きゃ！」

女学生B「いゃん！何なの！？」

奥様「きゃ〜！」

ギャルA「あω！ちよっ 何 今の！？」

ギヤルB「サイヤク〜！変態、やω！」

おばちゃん「きゃ〜お巡りさん、スカートめくりよ！！」

なんと、スカートをはいた女性が怪人に襲われ、スカートをめくられている！

スカートめくり怪人だ！！

怪人「おー、あんなところにもスカートはいたやつがいるぞ！エヘッ。」

かな「待ちなさい！」

怪人「ん？何だ貴様？」

かな「アタシは魔法少女、『ゴスロリAngel』かなよ！」

怪人「お前がか！？神麗様が言ってた奴は。俺はスカートめくり怪人、『ヘンタイ』だ！！！」

かな「そのまんま…。」

ヘンタイ「お嬢ちゃん、セフィロト家の奴だろ？」

かな「違うわ！」

ヘンタイ「そうか、だが、知っているはずだ。」

かな「何よ!?!」

ヘンタイ「セフィロト家の者をな。お嬢ちゃんの持っている杖はセフィロト家の始祖、ケテル・セフィロトの作った物だ。つまりお嬢ちゃんはセフィロト家の誰かと接触していたという事だ!」

かな「あなた達も十勇士と同じでセフィロト家の一族を狙っているの?」

ヘンタイ「我等が魔王、神麗様がこの世界を支配するにはセフィロト家の者の力は絶対に必要なんだ、だから居場所を教えな!」

かな「教えないわ!」

ヘンタイ「そうか、ならパンツ見せなお嬢ちゃん!!!」

ヘンタイは大きな団扇を取り出し、強風を起こす。

かな「やだ、コレじゃパンツ見られちゃう!ドレス着るんじゃないかな...」

ヘンタイはカナに体当たりを仕掛ける!

かな「きゃ!」

ヘンタイ「へへ。」

かな「カナちゃんアース！」

地面が盛り上がりヘンタイを吹っ飛ばす！

ヘンタイ「ぎゃー！」

かな「まだよ、カナちゃんサンダー！」

ヘンタイ「がー！！！」

ヘンタイは消滅する。

今回もあっけなかった怪人との戦い…。

――魔王の城

側近「神麗様、ヘンタイがやられたとの報告が。」

神麗「そうか…次からは予の最強部隊、怪人四天王を送り込もう。」

側近「まじっすか！？。」

神麗「お遊びはもう飽きた。十勇士より先にケテル・セフィロトの末裔を捕え、早いところ人間界を手に入れよう。」

側近「まさか今まで遊んでいたのですか？」

神麗（また会えるな『ホド』よ…。

つづく

かな、夏休み

京子「あんた達、もうすぐ夏休みよ！」

加藤「やった。」

あみ「ローズベルトとデートしようかな。」

ローズベルト「じゃあ、おフランスへ行こうじゃないか、あみ。」

あみ「そうね、おフランスがいいわ…って、何で今いるの!？」

蒼汰「俺は新しく完成した別荘で誰にも邪魔されずに一人で過ごす。」

ユキコ「いいなあ別荘。カナちゃんは夏休みどうするの？竹一さんとデート？」

蒼汰「しかし兄ちゃんも趣味悪いよな、こんな怪しい女の子好きになるなんてよ。」

かな「ホントにいつも失礼な子よね、ガキ…。」

蒼汰「何だとお!？黒魔術師!！」

かな「そうやってすぐに怒るところ、やっぱりガキじゃん。」

蒼汰「ぐっ、強い。」

ユキコ「頑張って蒼汰くん！」

あみ「いや、普通は止めるでしょアンタ。」

ローズベルト「仲良しだね…。でも、ボク達には敵わないさ、そう
だろ、あみ？」

あみ「ああローズベルト!!」

ローズベルト「あみ…。」

京子「アンタ達、いい加減にきなさい!!」

――夏休み、蒼汰の別荘

蒼汰「あー、涼しいな…。って何でお前等いるんだよ!？」

あみ「だってどんな別荘かって気になったんだもん、ね、ローズ
ベルト？」

ローズベルト「ああ。でも風流でいい別荘じゃないか、美しいよ…。」

かな「うわあ、りんご飴が沢山!」

蒼汰「あーやめろ、それは全部俺のだ…あ、黒魔術師！お前まで！」

かな「二人に誘われて来ちゃた。」

ユキコ「私も。」

竹一「よっ、蒼汰。」

蒼汰「ユキコに兄ちゃんまで！？」

かな「蒼汰くん子供だし、一人じゃ怖くて泣き出すからさあ、皆で守ってあげるね」

蒼汰「ふざけるなあ！」

竹一「こんな大きなガキ、子守が大変だな。」

あみ「さあ蒼汰ちゃん、オムツ換えましようね」

蒼汰「いや、赤ちゃんじゃないっすよ。」

ユキコ「何か蒼汰くんかわいそう…。」

―――夜

あみ「お祭り行きたいな。」

ローズベルト「そうだね。」

蒼汰「行くならお前達だけでいけよ。」

あみ「そう言わずに行くわよ!」

あみは蒼汰を引っ張る。

しかし

――2時間後、蒼汰の別荘

蒼汰「うまく逃げ出せたぜ。」

かな「ちよつと蒼汰くん!」

蒼汰「げっ、黒魔術師!」

かな「ばれてないと思ったら大間違いよ!さあ戻るわよ!」

カナは蒼汰の甚平の袖を引っ張ると蒼汰がカナの腕を掴み、逆に引っ張った。

かな「?」

蒼汰は顔を赤くしながらカナから視線を反らし、人差し指でこめかみを掻く。

蒼汰「…ここに……居ろよ。」

かな「寂しいんでしょう？だったら皆の所に戻るよ！……でも、何か蒼汰くんと二人きりでお話したいな。」

蒼汰「でもお前、兄ちゃんとラブラブだろ？浮気にならない？」

かな「何言ってるの、ここに居ろって言ったのアンタじゃん。それにアタシ達お互い仲悪いし。さあ中に入る！」

今度はカナが蒼汰の腕を掴み、引っ張る。

かな「ここが一番いいわ、星空見ながら話せるし。」

そこは縁側だった。

蒼汰「ちょっと待ってる。」

そっいつて蒼汰はどこかへ行く。

しばらくすると蒼汰がりんご飴を二つ持って戻って来た。

蒼汰「ほら、やるよ。」

かな「えっ、くれるの？」

蒼汰「要らないならあげない！」

かな「だって蒼汰くん、りんご飴、大好物じゃん？」

蒼汰「この蒼汰様がやるって言うてんだ、感謝しな！」

かな「ありがと。」

カナはりんご飴を手にとる。

蒼汰はちよつと照れて、少しだけ間をあけてカナの隣に座る。

しばらく二人はりんご飴をかじりながら、黙って星空を見ていた。

蒼汰「星…キレイだな。」

かな「そうだね。でも…。」

蒼汰「でも？」

かな「『星よりもお前の方がずっとキレイだ。』って言うて欲しかったな…。80点、惜しい！」

蒼汰「うぜー！つーか、なに勝手にテスト始めてんだよ！」

それから二人は途中ケンカになりつつも仲良く話し続け、やがて眠りについた。

――朝

二人は目を覚ます。

かな「…ねえ蒼汰くん。」

蒼汰「ん？」

かな「寝起き、ブツサイクだね。」

蒼汰「何だとお！？てめえだって妖怪みてえじゃねえかつ！！」

かな「はあ！？アンタ妖怪見たことあんの！？」

蒼汰「うん、お前。」

あみ「ちよつと二人とも朝からうるさいわよ！」

かな「あみちゃん。」

蒼汰「皆大変だ、妖怪が現れたぞ！ん？」

蒼汰は手元に直系5センチほどのふわふわした謎の物体を見つけた！

蒼汰「何コレ？」

あみ「『ケセランパサラン』じゃない！？」

蒼汰「何だよその呪文みたいな名前は？」

あみ「知らないの？都市伝説に出て来る持ち主を幸せにする物体。動物が植物かも分からないから、妖怪とも言われているわ。」

蒼汰「おい、仲間つれてくんなよ。」

かな「ちがうわよ！でもなんかだか可愛いね。……ちょっと、ここで『お前の方がずっと可愛い。』って言わなきゃ、100点とれないわよ！」

あみ「は？何のテストしてるの？」

蒼汰「このケセラン何とかって言う奴、お前にやるよ。」

蒼汰はケセラン何とかをそっと手に取り、そっとカナの手のひらにのせた。

u
u
u
u

かな、夏休み2

7月30日

蒼汰「今日は俺の誕生日なんだ…。」

かな「そうなの？オメデト！」

ユキコ「占いによると7月30日生まれの人にはカリスマ溢れる王様タイプらしいよ。」

蒼汰「そういえば、俺って前世王様だったな。」

あみ「そうだ、誕生日パーティーしましょう！」

ローズベルト「それいいね、じゃあケーキはボクが作るよ…。カナちゃん、手伝って。」

かな「はい！」

あみ「じゃあ、あたしとユキコは飾り付けでも…。」

ユキコ「竹一さんはどうするんですか？」

ローズベルト「竹一は買い物行って来て。」

竹一（オレが買い物って、キャラ的に違和感が…。）

蒼汰「俺は？」

あみ「アンタは主役だから、外で時間つぶしてなさい。」

蒼汰「何で？」

あみ「だって準備とか見てると楽しみ無くなるでしょ。」

蒼汰「なるほど、わかった！それから妖怪（かな）にケーキに毒とか入れんなよって言うてくれ。」

あみ「あはは…言うておくわ…。じゃあ6時頃に帰って来て。」

――蒼汰が出た後

あみ「カナ、蒼汰ね、ケーキ楽しみにしてるわよ。『毒とか入れんなよ。』だって。」

かな「失礼しちゃうわね、毒なんか入れないわよ！」

あみ「じゃ頑張ってね。」

かな「うん！」

ローズベルト「ねえカナちゃん。」

かな「何ですか？」

ローズベルト「蒼汰、カナちゃんの事好きかも知れないよ。」

かな「先生までからかうんですか？蒼汰くんみたいに…。アタシは竹一さんに一途なんです！」

ローズベルト「でもカナちゃん、蒼汰と居るとき、よりかわいく見えるよ。」

かな「えっ？」

――4時頃

蒼汰は面白そうなガチャガチャを発見し、100円を入れる！

するとカラのカプセルが出てきた…

蒼汰「さ、詐欺だー！100円かえせこの野郎！ん？」

なんとカプセルが巨大化し、ぱかっと割れる…。

蒼汰「えっー！？」

蒼汰くんはカプセルの中に閉じ込められちゃいました…（笑）

???「はーはっは！」

くそムカつくピエロが現れた！たくさんのカプセルをジャグリングしている…

蒼汰「うわー、このカプセルスゲーな…いきなりでっかくなったぞ！面白いから１００円も面白いよ。」

ピエロ「いや、普通なら『出せよコラ！』とか言うだろう…。面白くない、こうなったら…」

ピエロは蒼汰が入っているカプセルを転がす！

蒼汰「ちょっと目が回るんだけどー！」

女の子「ママ、アタシもあれやりたい！」

ピエロ「そうかいお嬢ちゃん。」

ピエロはカプセルを女の子に投げつける！

当然女の子は閉じ込められちゃいました。

ピエロ「もーらい」

オカン「あ、返して！」

謎のピエロはカプセルで人々を捕まえては走り去っていく。

――同じ頃カナ達はテレビを見ながら、パーティーの準備を進めていた。

ニュースキャスター「先程訳の分からないニュースが飛び込んできました。現場から中継です。」

レポーター「こちらの方の話によると、突然ピエロが現れてガチャガチャのカプセルに市民を閉じ込めて、走り去ったそうです。つか、本当なんですか？」

オカン「本当よ、オマワリさんに言ったら病院で見てもらってこいつて5万円わたされるし…バカにしてんじゃないの!？」

レポーター「でも5万円儲けたじゃないですか。」

オカン「まあね。」

あみ「このレポーター馬鹿じゃない。」

ユキコ「それ以前にニュースが嘘っぽい。」

かな（まさか怪人！？）「ちょっとトイレ行ってくるね。」

カナはトイレに行くふりをして怪人の所へ行く！

つづく

かな、夏休み3

いかにも怪しい倉庫に謎のピエロの姿があった。

かな「出たわね、怪人！」

ピエロ「やはり来たか、ゴスロリAngel！」

かな「みんなを解放しなさい！」

カナは杖の先をピエロに向ける。

するとピエロは、ぶん殴りたくなるようなふざけた笑みを浮かべ、袋からカプセルを一つ取り出す。中には蒼汰が入っていた…。

蒼汰「あつ、妖怪！」

かな「だからアタシはカナって言うてるでしょ！」

ピエロ（いや、普通は人質になっていると思って『卑怯だ。』とか言うたろ…。）

蒼汰「お前やつぱり悪者だったんだな！？分かつぞ、俺達を100円のカチャカチャで売って、金儲けしようってハラだな！？」

かな「あんななんかタダでも売れないわよ！でも、カプセルの中に人が入って居たら、童話みたいでメルヘンチックよね。」

蒼汰「それはお姫様の場合だろう。」

かな「そうね、アタシがカプセルの中に捕まっているお姫様で、それを愛しの王子、竹一様が助けにくる…。いやーん、まるでディズニー映画だわ！」

蒼汰「題名はどうする？」

かな「うーん、『カプセル姫』なんてどう？」

蒼汰「お前ネーミングセンスゼロだなあ。」

かな「じゃあ『プリティカプセルプリンセスかな』ってどう？」

蒼汰「ダメ、却下。」

かな「だったらアンタが考えなさいよバカ！」

ピエロ（…オレ空気化してる。）

蒼汰「ば、バカだとお！？自分の最低ネーミングセンスを棚にあげて逆ギレしてんじゃねえよ！だいたいお前みたいなのが、ブス、お姫様に向いてねえよ。」

かな「ぶぶ、ブス!？」

ピエロ「あ、あのう…。」

かな「あつゴメン、忘れてた。」

ピエロ「俺様は道化怪人。こいつは 人質だぜ、お嬢ちゃん。」

かな「その人質うるさいからー、」

カナはカプセルに向けて魔法を放つ。

勿論中には蒼汰が…。

蒼汰「えっー!？」

蒼汰は魔法をくらい、眠る。
眠りの魔法だ。

かな「これでよし。さあかかって来なさい。カナちゃんファイアー
!」

杖の先からいつもより大きい火の玉が飛ぶ。
(魔力が上がったのか?)

ピエロ「無駄だ。」

そう言つてピエロがカプセルを投げる。するとカプセルがカナの魔法を中に閉じ込められた！

かな「そんなあ！」

ピエロ「お嬢ちゃんは俺には勝てないさ。」

かな「くっ、カナちゃんファイアー、カナちゃんウインド、カナちゃんサンダー！」

しかし、カナの魔法三連発も全てカプセルに閉じ込められる。

ピエロ「返してやるよ。」

ピエロは魔法を閉じ込めたカプセルをカナに投げつける！

かな「きゃー！！」

カプセルから解き放たれた魔法がカナに命中する。

ピエロ「ふふふ、これが怪人四天王である俺様の實力だ。」

かな（強い…。つか怪人四天王って何？）

ピエロ「さあ大人しく捕まりな。」

ピエロは空のカプセルを取り出す。

ゴゴゴゴゴゴ...

ピエロ「ん？」

かな「地震？」

ピエロ「ぎゃー！！」

突然地面が裂け、ピエロが中に落ちてしまった！

地震がおさまる...

???「危なかったな、カナ。」

かな「あつホド！助けに来てくれたんだね。」

さっきの地震はホドの魔法によるものだった。

かな「ねえホド、蒼汰くんにアタシが魔法使ってバレちゃった...。もう本当の事言っちゃおうかな？」

ホド「そうじゃな。」

カナはカプセルから蒼汰を解放する。

蒼汰「ZZZ…。」

かな「起きなさい！」
ばちゃん！

蒼汰「いてゝ！！何すんだよ妖怪！」

ホド「…。」

かな「ねえ蒼汰くん、ちょっと話があるの…。信じてくれる？」

蒼汰「っーかこのビーバー何？」

ホド「ワシはホドじゃ。」

蒼汰「喋った！？……分かった、こんな奴が居るんだから、お前の話しも信じてやるよ。」

かな「ありがとう。」

カナは自分が天使であり、人間界に落とされた事、天使に戻るために魔法使いになり、怪人を倒している事などを蒼汰に話した。

蒼汰「なるほどな。じゃあ、初めて俺と会った時、地面に座り込んで騒いでいたのは、人間になったばかりだったのか？」

かな「そうだよ。」

蒼汰「兄ちゃん（竹一）とのデートの途中にどっか行ったのも怪人を倒すためだな？まあ気にするな、お前が何者でも、俺達の友達には変わりねえからさ。」

かな「ありがとう蒼汰くん、ちょっと見直しちゃた。」

蒼汰「今更遅いつて…。」

かな「あ！」

蒼汰「何だよ？」

かな「パーティー始まっちゃう、早く帰らないと！」

蒼汰「本当だ！」

かな「一緒に帰ろう！そうだ、ホドもおいでよ！」

ホド「良いのか？」

かな「良いわよ、みんなにもアタシの秘密言っちゃおう！」

―――帰宅

蒼汰「うわー真っ暗だ。」

蒼汰は明かりをつける。

p u n !

クラッカーが鳴り響く。

ローズベルト「16歳のお誕生日おめでとう、蒼汰くん。」

蒼汰「…普通じゃねえか！」

あみ「あら、文句言うならパーティーやめようか？（笑）」

ユキコ「おめでとう。」

竹一「16かぁ、俺はてつきり6歳の誕生日かと思った。6歳にしてはデカイし、老けてると思ったら16だったのか？悪い悪い。」

蒼汰「何だと!？」

かな「あの、ちょっと話があるの。」

あみ「なに？」

カナは自分の秘密を話す。

――

ユキコ「へえ、カナちゃんが天使だったなんて、ロマンチック。」

あみ「じゃあ、トイレでアタシ達を魔法で助けてくれたのも本当だったのね。」

竹「……。」

あみ「それならはやく言ってくればよかったのに……。それよりパーティーを始めましょ！」

ローズベルト「そうだね。」

蒼汰の誕生日パーティーが始まり、遅くまでカナ達の笑い声が響いた。

つづく

かな、体育文化祭

魔王の城

神麗「ピエロがやられた？ありえぬ、予の怪人四天王の一人が簡単に！？」

側近「今回は偵察を送りませんでしたからね。なにがあつたのか…。スカートめくり怪人との戦いの時に送った偵察によると、怪人四天王を倒す程の魔力はなかったそうです。」

神麗「となると、『ゴスロリAngelかな』が短期間で魔力をあげたか、それとも…」

側近「まさかセフィロト家の誰かが？」

神麗「予もそう思つておる…。」

神麗は玉座のそばにある“繭”^{まゆ}に目をやり、笑みを浮かべた…。

——ホドの家

かな「やった！」

魔法で異空間を生み出し、カナは喜ぶ。

カナは今のままでは魔王、神麗はおろか、怪人四天王すら倒せない
と思い、修業を始めたのじゃ。

ホド「その異空間を生み出すことで、人目を気にせず戦えるぞい。」

こうして夏休みの終わりには、カナの魔力は格段に上がったのじゃ！

――二期

考查。

カナは苦手な科目を蒼汰に教えて貰った。

そして考查が終わり…

京子「あんた達、もうすぐ“体育文化祭”よ！」

あみ「なにそれ！？」

ユキコ「まさか…。」

ローズベルト「そうだよ、ユキコちゃん。この学校では体育祭と文化祭を同時にするのさ…ばらばらだと面倒だからね。」

あみ「ああ、愛しのローズベルトさま！保健室の仕事をサボってまで会いに来てくれたのね！！」

蒼汰「…。」

あみ「なによ！？」

蒼汰「いや…。」

かな「で、何をするんですか？」

京子「例えば、体育祭に模擬店を出すとか。」

ユキコ「結構単純ね。」

あみ「つーか同時にするとか疲れそう…。」

京子「ま、三日後までに出し物考えな！」

――保健室

あみ「ねえローズベルト、体育文化祭どうしようか？」

ローズベルト「フフ、ボクは毎年イタリア料理店できまりなのさ…
美味しいパスタでも召し上げれ…。ピザやドルチェ（デザート）
もあるよ…。」

かな「へえ、その料理店絶対に行きます！ローズベルト先生の料理
って本当に美味しいですもんね！」

ローズベルト「ご来店、お待ちしておりますよ…。」

つづく

かな、体育文化祭2

三日後に沢山の案が出る。委員会で各学級から出された案について審議され、翌日。

あみ「クラス対抗綱引きか、絶対勝つわよ。」

蒼汰「俺だったら一人で勝てそうだな。」

ユキコ「じゃあ、蒼汰くん一人で決定ね!」

蒼汰「まかせとけ!」

あみ「カナにカッコイイとこ見せれるわね...」

蒼汰「ち、違うつて...」

あみ「好きって言っちゃえばいいのに...、素直じゃないわね。だいたいカナを見たら胸が痛くなるって好きって証拠よ。」

蒼汰「いや、それはあいつの呪いだろう...」

京子「言い忘れてたけど、ブロック対抗で、ウチのクラスはカマキ

リブロックよ。お前ら、カマキリのように気合い入れていきな！」

ユキコ「か、カマキリ？」

京子「で、ブロック対抗お化け屋敷リレーにでたい奴はいるか？」

かな「お化け屋敷リレー？」

ローズベルト「お化け屋敷の中でリレーをするのさ……。」

あみ「ああ、愛しのロー（以下省略）」

京子「カナ、気になったって事はお前出たいようだな？」

あみ「そうね、カナに決定。」

かな「ええ、そんな……。怖い嫌。」

あみ「だめよ、語尾にハートマーク付けたって無駄。」

かな（付けてないし……。）

蒼汰「俺に胸が痛くなる呪いかけた罰だな。」

ユキコ「それは蒼汰くんがカナちゃんの事好きだからでしょ。」

蒼汰「違う!」

かな「そうよ!アタシは竹一さんのシンデレラなの!あく竹一さん
…。」

あみ「カナ、今、天に召される感じがしたんだけど…。残念ね、蒼汰。どうやらカナは本当に竹一さんが好き見たいよ。」

ユキコ「これも甘酸っぱい恋の思い出…。」

それから2週間ほど準備に取り掛かり、体育文化祭前日、魔王の城では新たな企みが…

神麗「明日、人間界で体育文化祭なる催し物があるそうだな?怪人四天王の一人、ゴキブリ怪人ブリブリよ、明日、食い物を奪い、予の所に持って参れ!」

ブリブリ「ははっ、神麗様!」

つづく

かな、体育文化祭3

体育文化祭当日のホドの家

かな「今日は気合い入れて姫ロリで行こうつと、いやでも、和ゴスも着たいし、普段通りゴスロリもいいしどうしようか？」

ホド「それならスーツケースに着たい物を入れて持っていくといい。」

かな「そうか、さすがホド、頭いいね！」

――

かな「じゃあ行こうかホド。スーツケースが20個になっちゃったけど、魔法で小さくすれば平気だね。」

ホド「それはそうなんじゃが、20個は少々多すぎんかの？」

かな「えー、そんなことないよ。」

ホド「三日間もあるし、数を減らした方が…。」

かな「あつ、竹一さん！」

竹一「おう…。そのビーバーも行くのか？」ホド「わしはホ…！」

かな「竹一さんも行くんですね？」

竹一「まあ暇だしな。」

かな「それより今日の衣装どうですか？気合い入れて姫口りにしたんですよ。」

ホド「おいおいカナ、遅刻するぞ。衣装選びに時間使ったんだから…。」

かな「あつ、ホントだ！じゃあ竹一さん、後で学校で会いましょう！」

――

かな「はあ、なんとか間に合った。」

ユキコ「あつ、カナちゃんおはよう。」

かな「おはようユキコちゃん！」

ユキコ「ホドさんも来たんだね？」

かな「ホド、アタシ達ならいいけど、他の人達の前では話しちゃだめだよ！」

ホド「言われんでもわかつちよるわい！」

ユキコ「カナちゃん、開会式の後すぐクラス対抗綱引があるよ。楽しみ。」

かな「蒼汰くん一人だけって大丈夫かな？だって1クラス40人だよ。1対40って無謀すぎじゃない？」

「???」「あらカナ！」

かな「めっ、女神様！どうして人間界に？」

西王母「天上界ばかり退屈だからよ！そんな事も分からないわけ！？大体来て早々どうしてアタに会うのかしら！？」

ユキコ「この人がカナちゃんを人間にしたっていう女神様？綺麗な人ね…。」

西王母「何よアタ！？しかもまた生意気にかわいい小娘…許せない！！っ！かアタシは女神様よ、『人』『人』言わないで！！」

ホド（カルシウム不足な女じゃのう…。）

ローズベルト「カナちゃん、ユキコちゃん、ホドさん、開会式始まるよー!」

ユキコ「あつローズベルト先生。行こう。」

かな「うん。」

西王母「あら、なんて王子フェイスなお方なのかしら…素敵…。」

つづく

かな、体育文化祭 4

開会式、校長が話す。

『快晴にめぐまれ…』とか長々と話しているが、正直うざい。そんな話しまともに聞いている奴なんていない。みんな早く始めろぐらいしか思っていない。

そして校長のうざい話しが終わり、体育文化祭スタート！

プログラム No. 1

『クラス対抗綱引き』

はたして蒼汰はたった一人で優勝し、カナにカッコイイ所を見せられるのだろうか？

全8クラスでトーナメント形式。

三連勝で優勝決定。

まずはA組とカナや蒼汰達のB組の勝負。

ピストルの音が鳴りスタート。

A組は一斉に綱を持ち引つ張る。
しかし蒼汰は引つ張らない。

かな「ちよつと何やつてるの蒼汰くん!？」
あみ「あーあ終わった…。」

誰もが蒼汰の負けと思っていた。

A組なんか全員勝ち確定と言うような顔をしていたが…
なんと蒼汰はギリギリのところで綱を掴み、止めた!

かな「うそ!？」

竹一「!」

これにはさすがのクールな竹一様ですら鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をした。(言い過ぎ。)

ユキコ「一気に逆転よ、蒼汰くん!」

あみ「いや、普通は驚くところだから…。」

ホド(あの少年…まさか…。)

驚く観客どもを尻目に蒼汰は綱をゆっくり引いていく。

蒼汰「残念だったな、相手が一人だからって、油断したな。」

そして蒼汰は余裕勝ち！

あみ「信じられない…。」

ローズベルト「すごいね、蒼汰くん。」

こうなれば結果は見えている。

他のクラスの奴らは戦意を喪失し、見事蒼汰は一人でB組を優勝に導いた！そしてカナにカッコイイところを見せる事ができた…？

かな「やるじゃない蒼汰くん！」

蒼汰「たいしたこと無いって。」

あみ「調子に乗るな。」

かな「でも、アタシの竹一さんへの愛は揺るがないわよ。ね、竹一さん？」

竹一「…。」

その後は何事もなく、午前の部は終了した。

午前の部が終わると、皆がバーゲンセールのように一斉に模擬店に向かう。

カナ達も急いでローズベルトのイタリア料理店に行き、席をゲット
！！

ここで楽しく昼食タイムのはずなのだが、そうは行かなかった。

『きゃー！！ゴキブリ！！！！』

『ちょっとヤダっ、スカートの中に入らないで！』

『っーかマジでこの大群何？』

カナは外に出る。

見ると、たくさんの人や模擬店がゴキブリの大群に襲われていた！！

かな「ご、ゴキブリ…きゃあああ！！！！！！」

つづく

かな、体育文化祭 5

かな「ダメ、ゴキブリダメ!!!」

カナは店の中に戻る。

ホド「怪人の仕業には間違いないが、この中には入ってこれんようじゃ。」

かな「こんな沢山のゴキブリどうすれば...。」

ローズベルト「カナちゃん、これ。」

かな「ローズベルト先生、それって玉葱ですよね?」

ローズベルト「ゴキブリは玉葱が好物だから、これで一箇所に集められると思うよ。」

かな「そうなんですか?わかりました。」

カナは玉葱を持って外に出る。

すると早速ゴキブリの大群がカナを追いかけてきた!

かな「ヤダ、こ、来ないでえ！！！」

ゴキブリ軍団がカナを追いかけている隙に他の人達は逃げる。

かな「ちよつと何処まで追つて来るのよ!？」

蒼汰「玉葱持つてるからだろ…。」

あみ「パニックでそんなこと分らないんじゃないの?」

ユキコ「カナちゃん、玉葱捨てて、でなきゃずっと追つて来るよ!」

かな「あ、そつか。」

蒼汰「馬鹿だ。」

カナは玉葱をゴキブリ軍団目掛けて投げ捨てる。

ローズベルトの言った通りゴキブリが玉葱に集まってきた。

カナは異空間を作り、ゴキブリと共に中に入る。

玉葱に集まったゴキブリの大群は合体し、サングラスをかけ、人間の手足を持ったゴキブリの怪人となった。

怪人「玉葱うまかった。オレ様は魔王、神麗さまに仕える怪人四天王のひとり、ゴキブリ怪人ブリブリだ。神麗さまの命令により、食い物を頂いていくぜ。」

かな「アタシは魔法少女、『ゴスロリAngel』かな。よ！今日は姫ロリだけだね。せつかくのお祭りを荒らすなんて許せない！覚悟しなさい！！」

ブリブリ「たつぷりと可愛がつてやるぜ、お嬢ちゃん。これでもくらえ！」

ブリブリは口からゴキブリの幼虫を数匹吐き出した！気持ち悪い！！！！

かな「やだっ。ならばこっちは『カナちゃんピンクグレープフルーツファイヤーフラッシュ大根バーニングスペシャルヴォルケイノ！！！！』」

ブリブリ「ぐああ！！（ネーミングセンス最悪だ！）」

かな「どんなもんよ！」

ブリブリ「へへ…ゴキブリの生命力を舐めてもらっちゃ困るぜ！」

かな「再生！？」

ブリブリ「周りを見てみな。」

かな「げっ。」

カナが辺りを見回すと、ブリブリが沢山！！

かな「分身まで出来るの！？」

ブリブリ「違うな、さっきの幼虫どもが急速で成長したのだ。しかも全員オレ様と同じ戦闘力！！さあどうするお嬢ちゃん？」

かな「もう見てるだけで鳥肌が立つ。」

カナは魔法を連発し、やっとな匹倒すが、一匹倒す間にブリブリが

次々と増える！！

ブリブリ「そろそろ終わりにしようか、『ブリブリアタック』」

かな「きゃ！いたた…。」

カナちゃんピンチと思いきや…

シュツ、シュツ…！

白い泡がブリブリ達にかかり、ブリブリ達が消滅する。

ブリブリ達「ぎにゃあ…！」

蒼汰「さすがのゴキブリでも虫である以上『殺虫剤』喰らったらおしまいだな。」

かな「蒼汰くん、どうして！？」

蒼汰「何か入れそうな気がしたんだ。」

かな「そうなんだ…。つーかそれ『カビキラー』じゃない！…！」

蒼汰「あつ、ホントだ。」

かな「……。」

蒼汰「……。」

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8708p/>

ゴスロリAngelかな

2011年11月17日17時42分発行